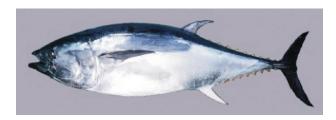
大西洋クロマグロ 西大西洋

Atlantic Bluefin Tuna, Thunnus thynnus



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会(ICCAT)

最近の動き

ICCAT での最新の資源評価は 2014 年 9 月に行われた。ICCAT の科学委員会(SCRS)は大西洋クロマグロに関して 2016 年に資源評価データ準備会合を開催し、次回以降の資源評価に向けて、生物学的データ及び資源評価手法を検討した。SCRS の管理勧告を踏まえ 2016 年 11 月に委員会は、2017 年の総漁獲可能量(TAC)を設定した。次回の資源評価は 2017 年に実施する予定である。

生物学的特性

■体長・体重:尾叉長 4.0 m・700 kg

■寿 命:32歳 ■成熟開始年齢:9歳

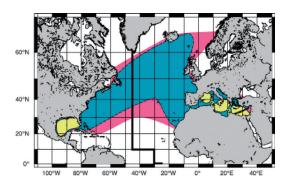
■産卵期・産卵場:5~6月、メキシコ湾

■索餌場:北緯35度以北の大西洋 ■食性:魚類、甲殻類、頭足類

■捕食者:まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身・すしなど



大西洋クロマグロの分布域(赤)と主要漁場(青)、産卵場(黄) 索餌場は産卵場を除く分布域。縦太線は東西の系群の境界。

漁業の特徴

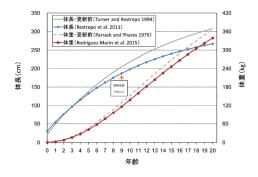
主な漁業国は、米国、カナダ及び日本である。日本の漁獲は全てはえ縄、米国及びカナダではロッド&リールと呼ばれる釣り漁業が主体である。漁期は、米国が主に $7 \sim 11$ 月、カナダは $8 \sim 11$ 月である。日本の従来の漁期は $11 \sim 3$ 月であったが、2009 年の個別割当制度(IQ 制)導入により徐々に早まり、現在は $9 \sim 12$ 月である。

漁獲の動向

漁獲量は 1981 年までは 5,000 トン前後で推移したが、漁獲規制により 1983 年以降は 2000 年代半ばまで 2,500 トン前後となっている。2002 年に、1982 年以降で最大の 3,319 トンに達した後、1,800 トン前後で推移し、2013 年には過去最低水準(1,482 トン)を記録した。2015 年以降の TAC は 2,000 トンに設定され、2015 年の漁獲量は 1,839 トンであった。2003年以降の漁獲量の減少は、米国での不漁が主な原因である。

資源状態

SCRS における 2014 年の ADAPT VPA を用いた資源評価におい て、親魚資源量は1970年代に約5万トンから2万トンに大幅 に減少した後、1980年代から2000年頃までの期間に1970 年代初頭の25~36%水準(1.5万トン前後)で比較的安定し ていたと推定された。2000年半ば以降、親魚資源量に急激な 増加傾向が見られ、2013年の親魚資源量は約3万トン(1970 年の59%)と推定された。2010年の資源評価では高水準と評 価されていた 2003 年級の加入量は、最新の資源評価において も 2012 年資源評価と同じく、2010 年の資源評価よりも低く 見積もられ、当該年級が2002・2003年級の両方で構成され るとの結果となった。しかし、これは漁獲物の年齢組成を推定 する際に隣り合う年級群の判別が高齢になるにしたがって不鮮 明になる技術的な問題によるものであり、現実には 2003 年級 の加入水準は高かった(約19万尾)と認識された。加入量(1 歳魚) は 1976 年以降、2003 年を除き、低いレベルで推移し ている。2016年のSCRSでは、最近年の資源量指数に関する 情報及び更新した将来予測結果に基づき、2014年の資源評価 と判断が変わらないことを確認した。



大西洋クロマグロ(西系群)の年齢あたりの体長と体重 青は 2010 年の資源評価で更新された成長曲線、灰色の実線は更 新前を示す。図中の矢印は成熟体長を示す。

赤は 2015 年に更新された体重曲線、灰色点線は更新前を示す。

管理方策

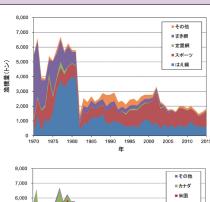
ICCAT は 1998 年に、2018 年までに 50% 以上の確率で資源を 最適な状態(SSB_{MSY})に回復させるという管理目標を定めた。 現在の管理の指標 (MSY) に用いている 2 つの極端な再生産関 係の仮定(高加入、低加入シナリオ)の解決が期待されているが、 SCRS は解析並びに議論の結果、加入シナリオの高低について はどちらかを選択できないと結論付けた。SCRS は 2014 年の 資源評価において、漁獲量を 2,250 トン以下にすると、2019 年までに現状またはそれ以上の資源量が得られるとした。ま た、現在の漁獲量(1,750トン)を維持することはより早い資 源量の増加につながり、加入シナリオの検証にも役立つとした。 2016年の年次会合では、2014年の決定(Rec. 14-05)を継続 し、2017年のTACを2,000トン(日本は346トン)とした。 また他の規制として、SCRS が資源崩壊の危機を認めた場合は 漁業を停止、体長 115 cm (または体重 30 kg) 未満の個体の 漁獲量制限(国別に漁獲量の10%未満とすること並びに小型 魚から経済的利益を得ない方法を開始すること)、産卵場(メ キシコ湾)における産卵親魚を対象とした操業の禁止及び漁獲 証明制度が実施されている。

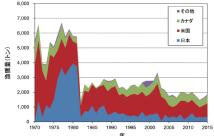
資源状態のまとめ

- ADAPT VPA で資源量を推定
- 2000 年半ば以降、親魚資源量は急激な増加傾向に転じ、 2013 年は約3万トン。
- ■資源水準は中位、増加傾向
- 2003 年級の加入量(1 歳魚)は約19万尾で水準は高かったと認識
- ■本種の西系群と東系群は混合しており、東系群の資源量が西 系群よりはるかに大きい

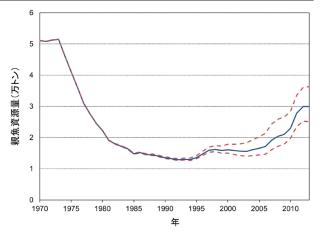
管理方策のまとめ

- 2018 年までに 50% 以上の確率で資源を最適な状態(SSB_{MSY}) に回復させる
- 2017年のTACは2,000トン
- ■小型魚漁獲制限
- ■漁期・漁場の制限
- SCRS が資源崩壊の危機(資源の回復が困難な状況)を認めた場合、漁業を停止

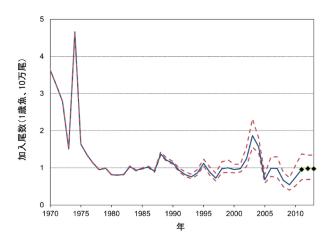




大西洋クロマグロ(西系群)の年別漁法別漁獲量(上)と年別国 別漁獲量(下)。漁獲量には投棄分も含まれる。



大西洋クロマグロ(西系群)の親魚資源量の経年変化 資源評価モデルでの推定親魚資源量。上下の点線間は80%信頼範 囲。



大西洋クロマグロ(西系群)の加入尾数(1 歳魚)の経年変化 資源評価モデルでの推定加入尾数。上下の点線間は80%信頼範囲。 最近年(2011 ~ 2013 年)の加入尾数の推定値は、推定精度が低 いためマークを変えた。

大西洋クロマグロ(西大西洋)の 資源の現況(要約表)	
資源水準	中 位
資源動向	増 加
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	1,482 ~ 2,007 トン 最近(2015)年:1,839 トン 平均:1,742 トン (2011 ~ 2015 年)(投棄を含む)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	289 ~ 578 トン 最近(2015)年:347 トン 平均:366 トン (2011 ~ 2015 年)
最新の資源評価年	2014年
次回の資源評価年	2017年